

白藍塾オリジナル

2010入試小論文分析&解答のヒント

2010年3月発行

白藍塾の入試小論文分析は、他の予備校と違って、その問題に対して受験生がどのようにアプローチすればよいのかを具体的に説明している。そのため、この分析を参考にすれば、誰でも合格レベルの答案を書けるはずだ。該当の大学・学部の志望者は、ぜひ、これを読んで、自分で実際に答案を書いてみてほしい。

執筆・樋口裕一・大原理志・大場秀浩

●慶応・環境情報学部

それぞれ三つの部分から成る二つの資料を読んで答える問題だが、資料そのものはどちらも読み取りやすい。設問も、ここ数年続いたプレゼンテーション的な問題ではなく、ストレートな小論文問題に近いので、取り組みやすいはずだ。

問題1は、資料Aを踏まえて、「電子的な図書館」（世界のすべての書物をデジタルデータ化して、誰もがインターネットによってアクセスできる状況）が実現した場合の日本語への影響を考えることが求められている。筆者はその点について直接意見を述べてはいないが、資料A-2とA-3を合わせて読めば、筆者の言いたいことはわかる。資料A-2をまとめると、『電子的な図書館』が真に人類共通のものになるのは、現在の普遍語である英語によるのみであり、英語が読めなければ使えない。資料A-3をまとめると、「英語が世界の普遍語になりつつある現在、優れたテキストは、国語である日本語ではなく、英語で書かれるのが常識になっていく」。つまり、「電子的な図書館」が実現すれば、さらに英語の普遍語化が進み、国語としての日本語が失われる恐れがある、と考えられるわけだ。その考えが正しいかどうかを問題提起すればよい。

イエスで答える場合、筆者の示唆する考えを補足する形で、より具体的に説明すればそれでよい。逆に、ノーで答えるのであれば、「電子的な図書館」によって、むしろ日本語が保存され、継承されやすくなって、国語としての日本語の伝統が強固になる可能性があることなどを説明するといいただろう。いずれにせよ、500字しかないので、論を掘り下げる必要はない。

問題2は、資料Bに基づいて、印刷した書物と比べて電子テキストの長所と短所をまとめることが求められている。資料Bに挙げられている長所と短所を、それぞれ整理して説明す

ればそれでよい。

問題3は、大学生として、「電子的な図書館」の自分にとっての意味と望ましい使い方を論じることが求められている。最初に、「電子的な図書館」をどのように活用したいかを問題提起代わりにはっきり述べた上で、それを検証していく形にすればよい。もちろん、単にそれらしい心構えを書いても意味がない。資料A-1にあるように、文字メディアだけでなく視聴覚メディアも自由にアクセス可能になることを考えると、SFCのような学際的な研究スタイルにとって、「電子的な図書館」は様々な可能性を開くものであるはずだ。そのことを、自分の関心分野に即して具体的に説明すればよい。ただし、資料Bにあるように、電子テキストの信頼性はまだまだ低く、また安易にコピー&ペーストに頼って、自分で考えようとしなくなる危険もある。第二段落で、そうした問題点もきちんと踏まえて論じる必要があるだろう。

©執筆者の許可なく本紙の全部もしくは一部を無断転載、無断複写することを固く禁じます。

発行・白藍塾総合情報室 (03-3369-1179)

<http://www.hakuranjuku.co.jp>